

今週の為替相場見通し(2022年2月14日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		114.92 ~ 116.34	115.52	114.00 ~ 117.00
ユーロ	(ドル)		1.1330 ~ 1.1495	1.1346	1.1250 ~ 1.1450
(1ユーロ=)	(円)		130.40 ~ 133.15	131.02	129.75 ~ 132.00
英ポンド	(ドル)		1.3492 ~ 1.3643	1.3561	1.3520 ~ 1.3670
(1英ポンド=)	(円)	*	155.14 ~ 158.07	156.61	155.50 ~ 157.50
豪ドル	(ドル)		0.7066 ~ 0.7248	0.7137	0.6950 ~ 0.7250
(1豪ドル=)	(円)	*	81.41 ~ 83.99	82.37	81.00 ~ 84.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1)今週の予想レンジ: 114.00 ~ 117.00 円

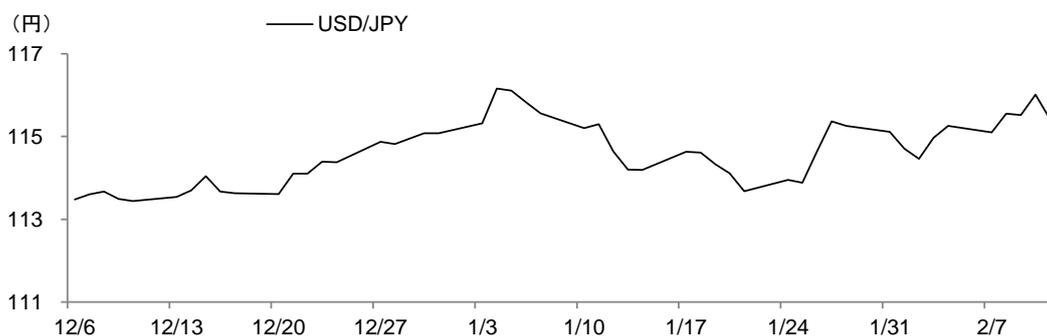
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は上昇。週初、115.23円でオープン。米株の冴えない動きが重しとなり115円を割り込む場面も見られたが、米金利の底堅い推移にサポートされ、115円台前半を推移。8日、新規材料がない中、米金利やクロス円の上昇を横目に115円台半ば付近まで上昇。一巡後も米長期金利が底堅く推移する一方で、米株も上げ幅を拡大し、ドル/円は確りと推移した。週央9日、オセアニア時間の流動性の乏しい時間帯で115.69円まで上昇。しかし、米金利の上昇一服や米1月CPIの発表を控える中、上値追いの展開とはならず。その後、米金利の軟調推移を眺めながらドル/円もじり安の展開となるも、終盤にかけて米金利が下落幅を縮めると、ドル/円は115円台半ばまで値を戻した。10日、日銀が14日に指値オペを実施すると発表したことが伝わり、115円台後半まで上昇。その後、米1月CPIが強い結果となると、米金利は2019年8月以来の2%台に乗せ、ドル/円は週高値116.34をつけた。一巡後は115円台後半へ押し戻されたが、ブラード・セントルイス連銀総裁のタカ派発言を受け、再度116円台へ乗せた。週末、ニューヨーク時間に、「プーチン大統領がウクライナ侵攻を決定」と伝わると地政学リスクが高まり、ドル/円は115.30円付近まで急落。その後もサリバン米大統領補佐官からも「ウクライナ侵攻が起きる恐れがある」との発言が伝わり、ドル/円は更に下落したものの115円手前では下げ止った。終盤にかけてはリスクオフの流れが一巡し、115円台半ばまで買い戻され、115.52円で越週。

今週のドル/円はウクライナ情勢を睨みながらも底堅い推移を予想。欧米の金利上昇や日銀の緩和縮小への思惑等もあってか、本邦の長期金利は上昇。遂にイールドカーブコントロールの上限である0.25%付近に近づいたため、日銀は約4年ぶりとなる指値オペを行い、無制限に国債を買い入れることを決定した。改めて緩和政策を継続しているという姿勢が示された格好である。日本の長期金利は天井が意識される中、一方でアメリカの金利は上昇を継続している。先週に発表された米1月CPIは前年比7.5%と約40年ぶりの物価上昇を記録しており、インフレ抑え込みのため、Fedの利上げが更に加速するとの見方が強まっている。米長期金利は2%付近まで上昇しており、日米間の金融政策差が明確な状況は、そのままドル高円安要因となるであろう。ウクライナ情勢については、米露電話会談など外交手段による沈静化を図っているが、ウクライナ国境付近でのロシア軍増強や同国からの即時退避命令が出るなど、事態は切迫化し予断を許さない状況。実際にロシア軍の侵攻が開始された場合のリスクセンチメント悪化による急激な円高リスクには警戒しておきたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(2/7~2/11)の値動き: 安値 114.92 円 高値 116.34 円 終値 115.52 円



2. ユーロ

(1)今週の予想レンジ: 1.1250 ~ 1.1450 129.75 ~ 132.00 円

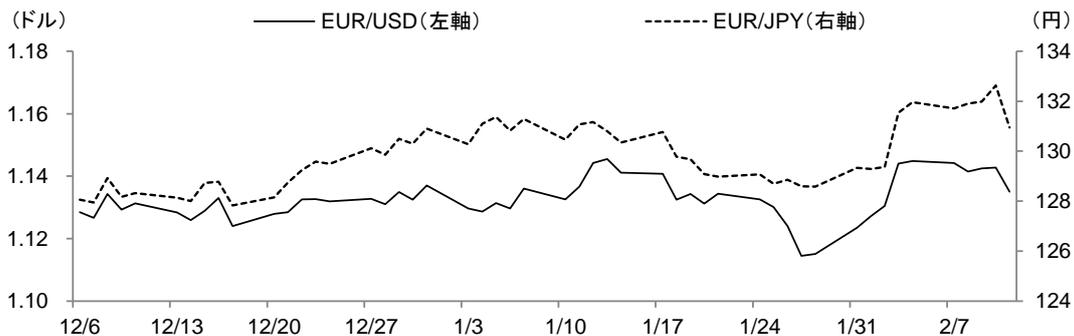
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、前週のユーロ買いの調整に加え、ウクライナ情勢を巡るヘッドラインを受けて1.13半ばまで下落する展開。週初7日、1.1460付近でスタートしたユーロ/ドルは、前週大きく上昇した反動のためか、売り優勢となり1.1415まで下落するも、前日安値(1.1411)付近ではECBの金融政策引き締めと思惑を背景に強まった買い意欲が下値をサポート。その後欧州議会公聴会でのラガルドECB総裁の発言を警戒し、1.1420-1.1440付近で神経質な値動き。ラガルドECB総裁は「インフレリスクは上振れ方向に傾いている」、「金融政策の調整は漸進的に行っていく」などと述べるも、特段サプライズは見当たらず、公聴会終了後はレンジ推移。8日、米金利上昇を意識したドル買いや欧州勢参入後のユーロの売りが下圧力となり、一時1.1397まで下落するも、押し目買いに下値をサポート。ビルロワドガロー仏中銀総裁の「ECBに対する市場の反応は強すぎた可能性がある」との発言を受けて、再び売りが入るも長続きせず、1.1410台を回復。9日も欧州時間に売りが強まるも、1.1400付近では押し目買いにサポートされ、1.1455まで反発。但し、新規の手掛かり材料に欠ける中、1.1430を挟んだ狭いレンジで小動きが続いた。10日はデギンドスECB副総裁が「インフレは従来の想定よりも長時間、高水準となるだろう」等と述べるも、反応は限定的。米1月CPIの結果にドル買いで反応したことから1.1375まで下落。しかし、この水準では押し目買いが控えており下げ渋り、反発上昇。一時1.1495をつけるも、節目の1.15手前で反落。ブロード・セントルイス連銀総裁のコメントを背景にドル買いが強まり、1.14台前半まで下落。11日も軟調推移が続き1.1370まで一時下押しされるも、押し目で買い戻され1.14台を回復。その後同水準で揉み合いとなるが、ウクライナ情勢を巡るヘッドラインに売りで反応し、ストップロスを巻き込みながら、一時1.1330まで急落。一巡後、1.1360付近まで戻すも、引き続き上値が重く、結局1.1346付近で越週。

今週のユーロ/ドル相場は上値の重い推移が継続か。3日にラガルドECB総裁よりタカ派色の強い会見を受けてユーロは大きく買われたが、その後の高官発言に続かず。その間にウクライナ情勢の緊張の高まりから、有事のドル買いからユーロが売られやすい展開が想定される。ロシアによるウクライナ侵攻について米ホワイトハウスのサリバン大統領補佐官は「いつ始まってもおかしくない」と述べ、警戒感が高まっている。フランスが事前に米ロ首脳協議に先立ちロシアと協議するも、対話継続程度で解決の糸口は見えない。12日の米ロ首脳協議の前に外相・国防相が協議するも、米国務長官からはロシアが数日以内にウクライナに侵攻する可能性があるとの見解に加え、実行すれば制裁を發動すると警告。今週はウクライナ情勢に関するヘッドラインからは目が離せない。その他重要イベントは15日(火)独2月ZEW景気期待指数、ユーロ圏2月ZEW景気期待指数、ユーロ圏10~12月期GDP、ユーロ圏12月貿易収支、18日(金)ユーロ圏12月経常収支が予定されている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(2/7~2/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.1330 高値 1.1495 終値 1.1346
(対円) 安値 130.40 高値 133.15 終値 131.02



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.3520 ~ 1.3670 155.50 ~ 157.50 円

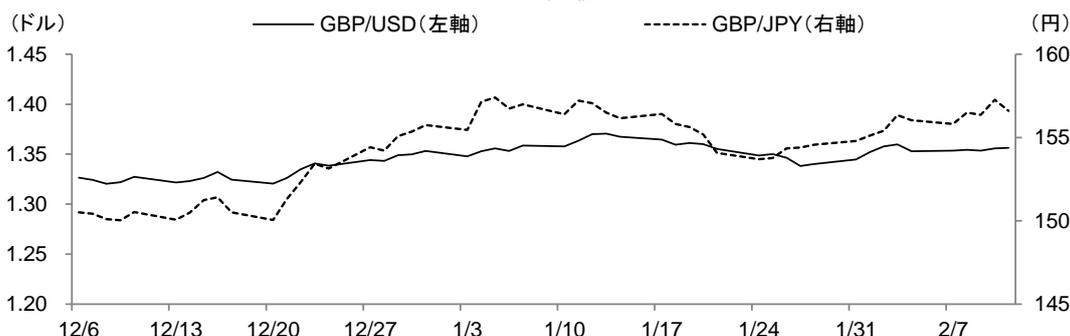
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは局地的な上下動を繰り返したものの、週を振り返って小幅上昇。対円では堅調推移を支配的としたものの、週引け直前の急落で、週を振り返ればやはり小幅上昇。対ユーロでは堅調気味の横ばい先行から、週引けを前にもう一段水準を切り上げた。この間、東ウクライナを巡る軍事的緊張や、ジョンソン英首相に対する辞任圧力などは、引続き市場関係者の大きな関心を集めていたものの、少なくとも11日までは大きな動きはなかった。最大の注目要因は10日の米1月CPIだったが、週明け直後から幅広く「今週最大の注目要因」と認められていた事実が、他の材料の乏しさを物語っていたようにも思われた。ポンドの堅調な滑り出しは、対ユーロでの調整的な反発がけん引していたように思われた。欧州中銀による年内利上げ開始観測を背景に、7日までにポンドは対ユーロで0.8474と昨年12月23日来の高値を更新したが、その後は頭打ちから軟調に転じていた。注目された米1月CPIは前年比+7.5%と、強めの予想(同+7.3%)を更に上振れ、40年ぶりの高水準に達したが、ドルの上昇は一時的で、程なく教科書的な「噂で買って、事実で売る」推移を見せた。その後、ドルが再び全面高に振れたのは、セントルイス連銀ブラード総裁が、3月の50bp利上げ、7月までに合計100bpの利上げを示唆するなど、極めて鷹派の姿勢を示したことが材料視された。11日には英10~12月期GDP暫定値、英12月鉱工業/製造業生産、同貿易収支などの英経済指標が発表されたが、特段予想よりも強い数字が並んだわけでもなく、その後のポンド堅調推移に貢献するような内容だったようには思われなかった。週引けを前にした急変動は、ウクライナ情勢のひっ迫を要因としたリスク回避の円高と、地理的近接を嫌気したユーロ安だった。ポンドは、対ユーロで上げ足を強めると同時に、対ドル、対円で明確に水準を切り下げて週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、まずは、ウクライナ情勢次第。15日(火)にはシュルツ独首相がモスクワを訪問する予定で、引き続き外交努力による緊張緩和は図られるものの、軍事的衝突に関する不透明感の払拭は難しいに違いない。万が一、米英が警戒するように、ロシア軍が今週中にもウクライナに侵攻すれば、金融市場が反応しないわけにはいかないだろう。主要通貨市場がどのような反応を示すかは、先週引け際の反応が参考になるのではないかと。リスク回避の文脈で買い上げられたのが、円、続いてドルだった一方、地理的近接や天然ガス高騰(ノルドストリーム2稼働の可能性が大幅に後退すること)への警戒感などで売り込まれたのがユーロ、ポンドはその両者の中間に位置付けられた。最大の注目材料は、誰にも予想がつかないプーチン大統領の判断ということになるものの、今週は、15日(火)に英10~12月平均賃金、16日(水)に英1月CPI、18日(金)に英1月小売売上高などの主要英経済指標の発表も予定される。主要国の金融政策動向は、日銀のそれを除いて、足元、激しく揺れ動いているが、英物価/景気動向次第で英中銀の利上げ見通しが大きく変容する可能性も考えられる。強い消費/インフレ圧力を示す数字=利上げ加速観測の高まりにポンド買い、逆に弱い消費/インフレ圧力を示す数字=利上げ先送り観測の高まりにポンド売りと、素直な反応が予想されるのではないかと。上掲「今週の予想レンジ」は、ロシアによる軍事侵攻が見送られることを前提としているが、英経済指標に関しては、市場全般の英1月小売売上高の強気予想に平仄を合わせる形で、英1月CPIの予想以上の上振れを警戒しての予想である。

(3)先週末までの相場の推移

先週(2/7~2/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.3492 高値 1.3643 終値 1.3561
(対円) 安値 155.14 高値 158.07 終値 156.61



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.6950 ~ 0.7250 81.00 ~ 84.00 円

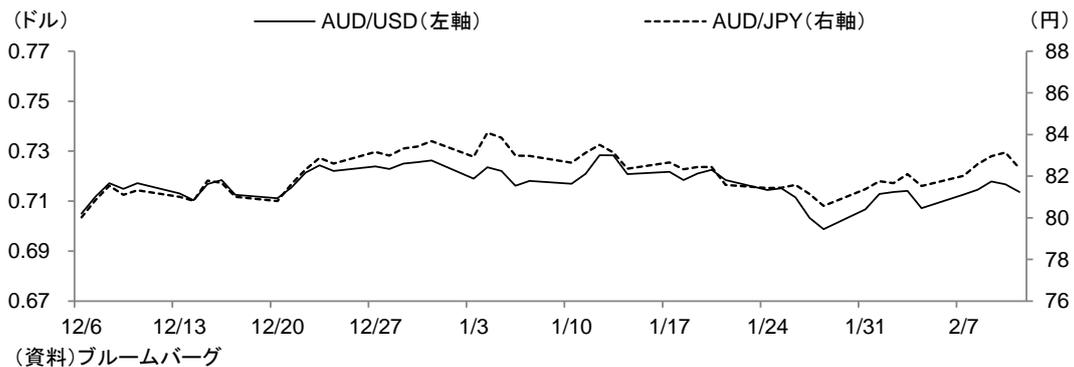
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

週初7日の豪ドルは0.70台後半でオープン。4日に発表された米1月雇用統計の結果が良好な結果だったことによるドル買い基調に、しばらくは軟調推移が続いたが、その後は株式市場の堅調推移を背景に徐々に値を上げ、0.71台まで上昇。その後も0.71台前半での推移となった。8日はやや値を上げる展開。各国債券市場が上昇する流れに乗り、豪ドルも0.71台半ばまで上昇。元RBAメンバーの「RBAが市場の期待に沿うように、今年後半に4回の利上げをすることも考えられる」との発言も後押しとなり、一日を通して堅調な推移が続いた。9日はめぼしい取引材料がなかったものの、前日の流れを引き継ぎやや豪ドル買い優勢の展開が継続。0.71台後半での推移を維持してクローズした。10日は米国時間に米1月CPIを控えてしばらくは小康状態。米CPIが予想を超える結果となるとドル買いが強まり、一時0.71台前半まで下落。その後米金利の上昇が一服したことや、イベント通過後のポジション調整の動きもあってか広範なドル売りが強まり、豪ドルは0.72台半ばまで急伸。ただ米金利が再度上昇し、株式市場も下落し始めると再度ドル買いの動きが加速し、豪ドルも0.71台半ばまで値を戻し、結局上に往って来いの展開となった。11日は明確な方向感が出ないながらも、前日クローズにかけての流れから、引き続きドル買いが優勢。豪ドルもジリジリと値を下げ、0.7137で越週した。

今週の豪ドルは上値の重い値動きを予想する。各国中銀が金融正常化に向けて舵を切りつつあるが、オミクロン株の流行が世界的に続いていることや、ウクライナ情勢に端を発する米ロの対立懸念等、依然として世界経済に影響を及ぼす可能性のある取引材料に警戒が必要な状況。そのような中、米1月雇用統計や米1月CPIの結果から、米国では3月の利上げ幅拡大や2022年中の利上げ回数増加に対する期待感が高まった。上記の材料に加え、当面の間はドル高基調が継続することが予想される。金利上昇に伴う株式市場の下落も警戒されており、豪ドルの上値は押さえられる展開か。いずれにせよ豪州特有の取引材料というよりは、米国の金融正常化に対する動向やマーケット全体のリスクセンチメントの良し悪しに値動きが左右されそうだ。今週の主な経済指標として、15日(火)にRBA議事要旨、16日(水)にウエストパック景気先行指数、17日(木)に豪雇用統計に発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/7~2/11)の値動き: (対ドル) 安値 0.7066 高値 0.7248 終値 0.7137
(対円) 安値 81.41 高値 83.99 終値 82.37



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。